

日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成

筑波大学大学院(博)心理学研究科 本多 潤子

筑波大学心理学系 桜井 茂男

Development of Japanese version of rejection sensitivity questionnaire

Junko Honda and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study developed a Japanese version of Rejection Sensitivity Questionnaire (JRSQ). This original questionnaire developed by Downey & Feldman (1996) conceptualized rejection sensitivity as the disposition to anxiously expect, readily perceive, and overreact to rejection. Thus rejection sensitivity may be seen as the anxious expectation of rejection in situations where rejection by significant others is a possibility. Eighteen-item questionnaire with a 6-point scale was completed by 431 Japanese university students. Analysis of results indicated that the JRSQ has high internal consistency ($\alpha = .80$). Correlation analysis with relevant scales confirmed the validity of this questionnaire. JRSQ scores were found to have a negative correlation with scores for secure attachment and positive correlation with those for insecure attachment (ambivalent, avoidant). They were also positively correlated with public self-consciousness and loneliness. The implications of rejection sensitivity of the Japanese are discussed.

Key words: rejection sensitivity, internal working model, cognitive-affective information processing.

他者から受容され、拒否されないようにするのは人間の基本的な欲求であるといえる (Baumeister & Leary, 1995; Horney, 1937; Maslow, 1987)。他者からいっさい切り離された生活というものは、人間の生存を脅かしかねない。したがって他者からの受容もしくは拒否は人間にとって一大関心事である。拒否されたことを認知すると、人間は敵意、嫉妬、失望などの感情を抱き、精神的な健康を損なうとされている (Baumeister & Leary, 1995; Coie, Lochman, Feuber & Heyman, 1992)。

しかし拒否されたことの認知やそれに対する反応は人によって異なる。例えば、AさんとBさんがCさんを昼食に誘いにいったとしよう。Cさんはそれに対して“忙しいからいけない”と断つたとする。AさんはCさんの返事を穏やかに受けとめ、別の機会にまた誘おうと考える。しかしBさんはCさ

んから意図的に拒否されたのだと思い、Cさんに憤慨した。

Downey & Feldman (1996)は、このCさんのような、拒否を認知しやすく、拒否に対して過剰に反応するような人を拒否に対する感受性の高い人 (rejection sensitive) と定義した。

拒否に対する感受性 (rejection sensitivity) とは、拒否される可能性のある状況で、拒否されるのではないかと案じるような傾向である。別の言葉で言えば、拒否されることを予期しやすく、拒否されることに対して大げさに振る舞う傾向のことでもある。

同じ事実を上記のように異なって受けとめる背景には何があるのだろうか。Feldman & Downey (1994)は幼少期に家庭内暴力にさらされた経験と現在の対人行動との間を媒介する変数として、拒否に対する感受性を上げた。つまり、幼少期に家庭内暴力

にさらされた経験のある者は、対人場面で拒否されるのではないかという不安が高まり、そのような不安が対人関係を悪化させてしまうということである。

Downey & Feldman(1996)は、拒否に対する感受性を愛着理論から捉えている。愛着理論では、幼少期の受容、拒否された経験が表象として内在化され(内的作業モデルとなり)、現在の社会的場面での情報処理を制御していると考えられる。幼少期に拒否されてきた人は、拒否に対して防衛的な情報処理や情動制御を行うようになる。つまり、あらかじめ拒否を予期し、それを避けることに最大限の情報処理資源をかたむけるようになるのである。そして彼らは、拒否を避けることに最大の価値をおくようになる。Downey & Feldman(1996)は、このような重要な他者からの拒否に対する脆弱性のことを、拒否に対する感受性と考えたのである。

そのような拒否に対する感受性とは、本来自己防衛的に発達してきたものである。しかしそれも過剰になると、かえってそのことが対人関係を悪化させることになってしまう。つまり、そういった人は相手の行動を“拒否している”と知覚しやすく、さらにお互いの関係性に不満を持ちやすいからである。またその結果相手に対して敵意や嫉妬をいだくようになる(Downey & Feldman, 1996)。そして結果的に、相手が自分から離れていくようにと仕向けてしまうのである。

Feldman & Downey(1994)は、こうした拒否に対する感受性をBanduraの期待価値モデルにそって、操作的に定義した。期待価値モデルでは、行動はそれに対しておく価値と期待によって予測できている。したがって拒否に対する感受性とは、拒否されるかもしれない状況において、拒否に対しておく価値(拒否に対する不安)と期待(拒否の予測)からなるものである。

重要な他者から受容されるのか、もしくは拒否されるのかということに対する不安や期待を測定する尺度が“拒否に対する感受性測定尺度”である。本研究の目的は、Downey & Feldman(1996)の拒否に対する感受性測定尺度に修正を加え、日本語版を作成し、その信頼性・妥当性を検討することである。

構成概念妥当性を検討するために、以下のような3つの尺度との相関を吟味する。

まず愛着の内的作業モデルと拒否に対する感受性との相関である。成人版愛着スタイル尺度は、Hazan & Shaver(1987)による尺度を戸田・詫摩(1987)が項目化した尺度である。乳幼児においてStrange Situation Paradigmで明らかになった愛着

の3分類を成人においても検討するために作成されている。3分類とは安定型、両極型、回避型である。戸田・詫摩(1987)は3つの内的作業モデルの型を個々人の中で背反するものではなく、同時に併存する相互に独立した特性として捉えている。

そこで本研究でも、“型”という表現は用いず、“安定性”、“両極性”、“回避性”という表現を用いることにする。安定性は人と親しくなりやすく、頼られたり、頼ったりすることを心地よいと感じる傾向である。両極性とは自分が求めるほどには相手は自分と親しくなりたいとは思っていない、または完全に他者と交わりたいという思いが相手をこわがらせてしまうといった傾向である。回避性とは人と親しくなるのは不快であり、完全に人を信頼することはできないとする傾向である。先行研究(Downey & Feldman, 1996)より、“安定性”とは負の相関、“両極性”ならびに“回避性”とは正の相関を持つものと予想される。

第2に、公的自意識尺度との相関である。菅原(1986)によると、公的自意識の強い人は、他者からの評価的フィードバックに敏感であり、集団の中で一人違った意見を言わないように対処するような行動をするという。鍋田・菅原・宮岡・佐久間(1986)の研究によると、対人恐怖症者の公的自意識は非常に高いことが見いだされている。また公的自意識と「拒否されたくない欲求」との関連性($r = .59$)も指摘されている(菅原, 1986)。公的自意識の強い人は人から評価されることに対して、否定的に反応する傾向がある。また鬼塚・永江(1994)らによると、公的自意識の強い者は、他者からの外的な評価に自己を一致させたい気持ちが強い一方で、他者に対する不安も強いため、他者と安定した関係を結ぶことが困難になるという。そこで公的自意識の高い者は他者からの評価や拒否的態度に対して敏感になるため、拒否に対する感受性が高くなるものと考えられる。そこで公的自意識と拒否に対する感受性との間には正の相関が予想される。

第3に、孤独感との相関である。守屋(1999)によると、他者に対して意見を表出しながらない青年(拒否されることを恐れる青年)は、他者を敵対的な相手としてみており、他者を自己の発達に関わり、親和的な関係を構築する相手としてはとらえていないという。また高校生と大学生を対象にした諸井(1987)の先行研究によると対人不安と孤独感との間に有意な正の相関があることが示されている。したがって、拒否に対する感受性の高い人は、孤独感も高いと予想される。

本研究では落合(1983)による孤独感尺度との相関

を検討する。落合(1983)の孤独感尺度は2つの下位尺度からなっている。一つは、人間が本来一人ぼっちであるという個別性に対する気づきに関する“対自的次元”尺度、もう一つは、互いに相手の気持ちをわかりあえるという人間同士は理解可能であるかどうかに関する“対他的次元”尺度である。個別性に対する対自的次元の得点とは正の相関を、そして対他的次元の得点とは負の相関を持つものと予想される。

ところで、本研究で作成する尺度は、拒否に対する感受性の一般化を図るために、複数の重要な他者に物事を依頼する場面を設定している。重要な他者とは親、友達、先生、恋人、潜在的な友達となりうる人などを含んでいる。そこで、一般化された拒否に対する感受性がすべての対象に対して適用されるのか、もしくはある特殊な状況がある拒否に対する感受性を高めるような情報を活性化するかを明らかにするために、対象別の拒否に対する感受性についても比較し考察する。

方 法

被調査者 関東地方の国立大学2校、私立大学3校、専門学校1校の学生437名に調査の協力を求めた。このうち質問紙に記入もれがあった6名を除く431名(男性198名、女性233名)を分析の対象とした。平均年齢は19.94歳(標準偏差1.55)であった。

質問紙 (1)Rejection Sensitivity Questionnaireの日本語版：Downey & Feldman(1996)によって作成されたRejection Sensitivity Questionnaireの18項目を基礎にして、日本人にとって不適切な状況を修正し、日本語版を作成した。この尺度は、18の仮想的な対人依頼場面を設定している。それぞれの場面において、相手から受容されるのか、もしくは拒否されるのかということに対する認知的枠組みを以下の2つの側面から測定する。その側面とは、①各側面で、受容あるいは拒否されるという結果をどれくらい心配に思うか、②相手からの受容あるいは拒否される可能性はどの程度とと思うのか、ということである。それぞれの評定は①に対しては“全く心配でない”から“非常に心配である”の6件法で、②に対しては“必ず断られる”から“必ず受け入れられる”までの6件法で、被調査者にあてはまる記号を選択させる方法で尋ねられた。また各項目の得点化は、①に関しては“全く心配でない”を1点と“あまり心配でない”を2点“どちらかといえば心配でない”を3点“どちらかといえば心配である”を4点“やや心配である”を5点“非常に心配である”

を6点とした。②に関しては“必ず断られる”(1点)“きっと断られる”(2点)“おそらく断られる”(3点)“おそらく受け入れられる”(4点)“きっと受け入れられる”(5点)“必ず受け入れられる”(6点)とした。①の得点と②の得点を反転させたものを掛けあわせた得点を算出し、その合計得点を“感受性得点”としている。

上記のような算出法は、Bandura(1986)の期待価値モデルに基づいている。本尺度では、Banduraの得点化にならって、結果に対する期待①とそれにおく価値②の両者を測定しその値をかけ合わせたものを“感受性得点”とした。

(2)成人版愛着スタイル尺度：これは対人関係における他者や自己についての表象を測定するために、詫摩・戸田(1988)によって作成された尺度である。自分の一般的な対人態度について述べた18項目(6項目×3下位尺度)からなる。これらの項目は特別な愛着人物に対する行動スタイルを測定するのではなく、人一般に対する行動スタイルを測定するものである。“安定性”、“両極性”、“回避性”のそれぞれの特徴を述べた6つずつの項目文から構成されており、“全くあてはまらない”(1点)から“非常にあてはまる”(7点)までの7件法で評定された。得点化はそれぞれの下位尺度ごとになされた。各下位尺度ごとに得点を加算し、項目数で割った値をそれぞれの下位尺度の得点とした。

(3)公的自意識尺度：Fenigstein, Scheier & Buss(1975)の自意識尺度を参考に、菅原(1984)が作成した自意識尺度のうちの公的自意識尺度11項目を用いた。自己の服装や髪型あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差を測定するものである。

各項目に対して、被調査者は当てはまる程度を“全く当てはまらない”“あまり当てはまらない”“どちらともいえない”“やや当てはまる”“非常に当てはまる”の5件法で評定する。得点化は“全く当てはまらない”を1点、“あまり当てはまらない”を2点、“どちらともいえない”を3点、“やや当てはまる”を4点、“非常に当てはまる”を5点とした。

(4)孤独感類型判別尺度：落合(1983)によって作成された孤独感の類型を判別する尺度である。2つの下位尺度からなり、個別性に対する気づきに関する次元の(“対自的次元”)9項目と、人間同士理解可能であると思うかどうかに関する次元の(“対他的次元”)7項目、計16項目からなっている。これら16項目の内容に対して、被調査者は当てはまる程度を“そう思わない”“あまりそう思わない”“どちらと

もいえない” “ややそう思う” “そう思う” の5件法 (-2 ~ +2点) で評定する. “対自的次元” の項目は, 個別性に気づいているほど高得点になる. また “対他的次元” の項目は, 人間同士は互いに理解・共感できると感じているほど高得点になる.

手続き “対人関係に関する調査” として, 一斉調査が行われた. 調査は1997年月10月中旬から11月初旬にかけて, 調査時間は15分程度で行われた.

結果と考察

1. 拒否に対する感受性測定尺度の構成

拒否に対する感受性測定尺度はすでに説明した通り, 2種類の評定からなっている. 1番目の評定では(以後 “価値得点” とする), 拒否されるのか受容されるのかといったことに対する不安を測定し, 2番目の評定では(以後 “期待得点” とする), その人物から実際に拒否と受容のどちらのフィードバックを受ける可能性が高いのかということを測定している. 得点化はすでに述べたとおりであり, 両者をかけあわせたものを “感受性得点” として採用した.

感受性得点の平均は10.25, 標準偏差は3.53であった. 価値得点の平均は3.45, 同標準偏差は0.84, 期待得点の平均は2.91, 同標準偏差は0.59であった.

日本と米国の感受性得点の差を検討したところ, (項目に修正を加えたため, 正確に両者の得点差を比較することはできないが) 日本における感受性得点の方が米国のそれよりも高かった ($t(1019) = 12.09, p < .001$). 高田・松本(1995)によると, 日本では相互依存的自己理解が, 独立的自己理解を上回る傾向にある. このようなことから推察して, 日本では拒否に対する感受性が米国に比べて, 高いことが予想され, 拒否に対する感受性得点は, 米国でのそれに比べて高くなったことが妥当であると考えられる.

また感受性得点, 価値得点, 期待得点の平均値を男女で比べた. Downey & Feldman(1996)の結果では性差は有意とならなかった. しかし本研究では, 感受性得点 ($t(431) = -3.09, p < .01$), 価値得点 ($t(431) = -4.51, p < .01$) で有意に女性の方が男性のそれよりも高かった. また期待得点に関しては男女差は見られなかった ($t(431) = -.37, n.s.$).

この結果は高校生男女1004名を対象にした安藤・境・渡辺(1977)の「拒否不安尺度」(親和傾向の下位尺度)の結果と一致している. 彼らの研究では, 男子に比べて女子の方が拒否不安が有意に高かった.

各項目の感受性得点の平均値と標準偏差は Table

1に示した通りである. 項目2, 項目13の2つの項目は, フロア効果が生じたものと判断し, 因子分析にはもちこまなかった. また価値得点, 期待得点の平均値, 標準偏差は Table 2に示した通りである.

2. 尺度の因子構造の検討

最終的に16項目を因子分析の対象とした. 共通性の初期値を1に設定し, 主成分分析法を実行したところ, 固有値が1以上で4因子が抽出された. しかしながら, 後続因子との間に固有値の差がみられたため, スクリーン法に基づいて1因子解を適当と判断した. 累積寄与率は25%であり, 第2因子, 第3因子の9%, 7%に比べて高かった. 第1因子への因子負荷量は Table 1に示す通りである. 16項目中15項目が .35以上で負荷していた.

男女別に検討したところ, Table 1に示すように因子構造に差がなかったため, 両者をこみにして分析をすすめた.

また価値得点, 期待得点の因子負荷量は Table 2に示す通りである.

3. 信頼性の検討

16項目について, Chronbachの α 係数によって内的一貫性を検討したところ .79であった. 男女別にみてもそれぞれ .79であった. これらはアメリカのそれ(.84)とほぼ同じであり, 内的一貫性が確認されたといえる.

4. 構成概念妥当性の検討

構成概念妥当性を検討するために, 本研究では内的作業モデル測定尺度, 公的自意識尺度, 孤独感尺度との相関を検討した.

まず内的作業モデル測定尺度について, 下位尺度別に α 係数で内的一貫性を検討したところ “安定性” は .76, “両極性” は .73, “回避性” は .69といずれも先行研究と同程度の値が確認された.

公的自意識尺度については .88とかなり高い値であった.

孤独感尺度については, 落合(1983)の作成した下位尺度ごとに α 係数を求めた. “対他的次元” 尺度(他者との関係に情緒的安定を見いだしているのかを測る次元)では .78, “対自的次元” 尺度(個別性独自性の認識を測る次元)では .63となった.

以上のように本研究で妥当性の検討に用いられる全ての尺度・下位尺度の信頼性は確認された.

構成概念妥当性を見るために実施した3尺度と “拒否に対する感受性測定尺度” との相関係数は Table 3に示されている. 感受性得点に性差が認め

Table 1 拒否に対する感受性測定尺度の因子分析の結果と基礎統計

No.	項目内容	因子負荷量			h^2	M	SD	I-T 相関
		全体	男	女				
1.	クラスの友人にノートを貸してくれるように頼む.	.40	.44	.33	.52	5.7	4.6	.28
2.	両親に専攻を決定する際に相談にのってもらう.	—	—	—	—	6.1	6.2	—
3.	よく知らない人をデートに誘う.	.44	.39	.46	.58	21.7	9.6	.37
4.	友人は今晚別の友達と出掛ける予定があるのだが彼(彼女)と一緒に過ごしたいと伝える.	.46	.44	.45	.42	14.8	8.0	.38
5.	生活費を上回るお金を両親にねだる.	.24	.14	.32	.55	14.9	9.6	.20
6.	授業終了後、教授に授業の分からないところを補習していただけないか尋ねる.	.43	.33	.51	.39	9.4	6.8	.33
7.	友人を真剣に怒らせた後でその友人に話し掛ける.	.58	.61	.54	.38	16.2	7.6	.47
8.	授業の後、誰かをお茶を飲み誘う.	.57	.64	.57	.47	7.2	5.7	.42
9.	卒業後に就職先が見付からず、両親にしばらく実家で暮らしてもいいかどうか尋ねる.	.32	.31	.34	.53	9.4	8.6	.27
10.	友人に夏休みを一緒に過ごさないか尋ねる.	.61	.69	.52	.55	9.8	6.4	.47
11.	恋人と言い争いをした後で電話をかけ、会いたいという.	.65	.71	.61	.59	12.8	6.9	.55
12.	友人の物を借りる事ができるか尋ねる.	.57	.54	.57	.45	7.0	4.9	.45
13.	両親にあなたにとって重要な行事があるときに訪ねてきてくれるように頼む.	—	—	—	—	6.1	5.4	—
14.	友人に大きなお願いをする.	.62	.56	.65	.44	16.3	7.9	.52
15.	恋人に彼(彼女)があなたの事を愛しているのかを尋ねる.	.52	.57	.49	.70	10.4	7.7	.40
16.	恋人にあなたの両親に会いにきてもらう.	.61	.62	.60	.60	13.1	8.7	.50
17.	飲み会で部屋の端にいる人に真ん中に来るようにいう.	.39	.40	.37	.23	11.5	7.9	.30
18.	恋人にあなたと一緒に引越してもらえるかどうか尋ねる.	.57	.54	.58	.55	8.1	6.0	.41

注1) $n=431$, 男性 $n=199$, 女性 $n=232$.

られたため、性の要因を統制して偏相関係数を求めた。

まず内的作業モデル測定尺度との相関について述べる。Downey & Feldman(1994)によると、拒否に対する感受性得点は“安定性”と $-.30(p<.01)$ 、“両極性”と $.24(p<.05)$ 、“回避性”と $.32(p<.01)$ であり、中程度の相関をもつことが予想された。本研究で同様の値を求めたところ、“安定性”とは $-.32(p<.01)$ 、“両極性”とは $.40(p<.01)$ 、“回避性”とは $.13(p<.05)$ と中程度もしくは低い相関が得られた。このことから本尺度の妥当性はほぼ確認されたといえる。

ただし本研究では先行研究の結果と異なって、“回避性”との相関が低かった。その理由として、日本においては、“回避型”にあてはまる人は少なく、“両極型”にあてはまる人が多いこと(Miyake, Chen & Campos, 1985; Takahashi, 1986)が考えられるであろう。回避性の傾向が高い人は、相互依存的文化の日本においては、よりその傾向を強め、潜在的に不安感を持っていても、それを顕在的には表さ

なかつたためと考えることができる。また Mikulincer, Florian & Tolmacz(1990)による愛着のスタイルと死への恐怖との関係のみた調査によると、“両極性”のスタイルを持つ人は顕在的に死への恐怖を報告したのに対し、“回避性”のスタイルを持つ人はTATのような投影法では“安定性”の人よりも恐怖感を示しているにも関わらず、顕在的には(質問紙に対しては)恐怖感を報告していないという。このように“回避性”の傾向を持つ人は恐怖感や不安感を防衛機制の抑圧という手段を用いて対処していると考えられる。したがって、若干“回避性”との相関は低くなったと考えることができる。

次に公的自意識尺度との偏相関係数を求めたところ、Table 3に見られるように低い相関が得られた。菅原(1986)の研究から予想されたよりも相関が低くなった原因としては、本研究の尺度が一般的な他者ではなく、親密な他者を想定しているためであると考えられる。しかし予想よりは低いものの仮説どおり正の相関が得られ、構成概念妥当性は一応確認されたといえる。

Table 2 拒否に対する感受性測定尺度の不安得点と期待得点の平均値と標準偏差および因子負荷量

No.	項目内容	因子負荷量						価値得点		期待得点	
		価値得点			期待得点			M	SD	M	SD
		全体	男	女	全体	男	女				
1.	クラスの友人にノートを貸してくれるように頼む.	.53	.57	.45	.38	.29	.43	2.2	1.1	2.5	1.4
2.	両親に専攻を決定する際に相談にのってもらおう.	—	—	—	—	—	—	2.0	1.3	2.6	1.6
3.	よく知らない人をデートに誘う.	.41	.37	.43	.36	.27	.38	4.3	1.2	4.9	1.5
4.	友人は今晚別の友達と出かける予定があるのだが彼(彼女)と一緒に過ごしたいと伝える.	.48	.48	.44	.48	.48	.46	3.7	1.2	4.0	1.5
5.	生活費を上回るお金を両親にねだる.	.58	.24	.43	.30	.30	.27	3.4	1.5	4.1	1.5
6.	授業終了後、教授に授業の分からないところを補習していただけないか尋ねる.	.58	.53	.58	.40	.37	.41	2.9	1.2	3.0	1.5
7.	友人を真剣に怒らせた後でその友人に話しかける.	.57	.63	.38	.55	.49	.59	3.3	1.1	4.9	1.3
8.	授業の後、誰かをお茶を飲み誘う.	.53	.64	.46	.57	.54	.41	2.7	1.0	2.5	1.4
9.	卒業後に就職先が見付からず、両親にしばらく実家で暮らしてもいいかどうか尋ねる.	.47	.39	.54	.33	.31	.33	2.4	1.5	3.5	1.8
10.	友人に夏休みを一緒に過ごさないか尋ねる.	.59	.66	.46	.52	.49	.53	3.2	1.1	2.9	1.3
11.	恋人と言い争いをした後で電話をかけ、会いたいという.	.60	.66	.48	.60	.67	.53	2.9	1.1	4.3	1.5
12.	友人の物を借りる事ができるか尋ねる.	.64	.63	.60	.60	.60	.59	2.4	1.0	2.8	1.4
13.	両親にあなたにとって重要な行事があるときに訪ねてきてくれるように頼む.	—	—	—	—	—	—	2.3	1.2	2.4	1.5
14.	友人に大きなお願いをする.	.67	.68	.59	.60	.60	.58	3.6	1.0	4.4	1.4
15.	恋人に彼(彼女)があなたの事を愛しているのかを尋ねる.	.56	.62	.50	.51	.60	.48	2.6	1.2	3.6	1.8
16.	恋人にあなたの両親に会いにきてもらう.	.62	.60	.64	.57	.55	.55	3.0	1.3	4.0	1.8
17.	飲み会で部屋の端にいる人に真ん中に来るようにいう.	.50	.52	.48	.41	.43	.34	3.4	1.3	3.2	1.5
18.	恋人にあなたと一緒に引っ越してもらえるかどうか尋ねる.	.61	.58	.59	.62	.61	.63	2.6	1.1	2.9	1.4

注1) $n=431$, 男性 $n=199$, 女性 $n=232$.

Table 3 拒否に対する感受性測定尺度と関連尺度との相関係数

尺度・下位尺度	相関係数
内的作業モデル測定尺度	
「安定性」	-.32***
「両極性」	.40***
「回避性」	.13*
公的自意識尺度	.19***
孤独感尺度	
「対自的次元」	.12**
「対他的次元」	-.39***

注1) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$. ($n=431$)

注2) 性差を考慮して、性差を統制して偏相関係数を求めている。

次に拒否に対する感受性と孤独感尺度のそれぞれの下位尺度との偏相関を求めた。その結果“対自的次元”では正の($r(430)=.12, p<.01$)，“対他的次元”では負の($r(429)=-.39, p<.001$)いずれも仮説どおりの相関が認められた。以上のことから、一般的に仮説は支持され、構成概念妥当性が確認されたといえる。

5. 対象別の拒否に対する感受性の検討

本研究で作成した尺度では、物事を依頼する対象として、友人、親、恋人、先生をとりあげている。それぞれの対象において、拒否に対する感受性得点に差異があるのかどうかについて t 検定を行った。その結果、拒否に対する感受性は、“親に対する状

況”（項目5, 9）と“友人に対する状況”（項目1, 4, 7, 10, 12, 14）では有意な差はなかったものの($t(435)=1.42, n.s.$), “親に対する状況”では“恋人に対する状況”（項目11, 15, 16, 18）よりも感受性得点が低く($t(435)=2.50, p<.05$), また“友人に対する状況”では“恋人に対する状況”よりも感受性得点が低かった($t(435)=2.69, p<.01$). このことから拒否に対する不安を感じやすいのは、対象とする相手に依存することがわかった。また一般的に青年にとって拒否に対する感受性が、最も高くなる対象は恋人であるということも推察された。

しかしながら、項目が等質であると言うことは検討されておらず、対象による影響なのか、項目の内容による影響なのかは明らかではない。今後さらに対象ごとに等質な質問項目を増やして、検討を重ねていく必要がある。

また今回“恋人”という対象を設定したため、一部の者は実際にはいない対象を想定して回答することとなった。そこで“恋人”に関する項目は実際の拒否に対する感受性とは異なっている可能性もある。今後の課題として、恋人のいる被調査者に限定して妥当性の検討を行う必要もあろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では日本語版の拒否に対する感受性測定尺度を作成した。修正は加えたものの、項目内容に文化差が影響するものが多かった。両親に対する項目ではフロア効果がでてしまう項目もあった。今後項目数を増やし、また対象別に検討を行うことができるように、それぞれの対象で等質な項目を設定することが必要である。

第2に、本研究では尺度の1因子性を主張したが、因子分析の結果から、両親、恋人など対象別に因子を構成する傾向のあることもわかった。さらに価値得点では依頼内容によって因子を構成する傾向があることもわかった。今後項目数を増やしてさらに検討を重ねていく必要がある。また性別に因子を検討していく必要もある。

第3にDowney & Feldman(1996)は過去の家庭内暴力にさらされた経験と拒否に対する感受性との関連性を指摘しているが、今後家庭での経験だけではなく、学校などでのいじめの経験、友人関係などとの関連性も検討していくことが望まれる。また拒否に対する感受性が実際の対人関係に与える影響についても検討していく必要がある。

引用文献

- 安藤清志・境 忠広・渡辺浪二 1977 親和－拒否不安尺度：日本版の作成 日本心理学会第41回大会発表論文集, 1150-1151.
- Baumeister, R. & Leary, M. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a functional human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Bandura, A. 1986 *Social foundations of thought and action*. Englewood Cliff, NJ: Prentice-Hall.
- Coie, J., Lochman, J., Terry, R. & Hyman, C. 1992 Predicting early adolescent disorder from childhood aggression and peer rejection. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **60**, 783-792.
- Downey, G. & Feldman, S. 1996 Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1327-1343.
- Feldman, S. & Downey, G. 1994 Rejection sensitivity as a mediator of the impact of childhood exposure to family violence on adult attachment behavior. *Development & Psychopathology*, **6**, 231-247.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F. & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- Hazan, C. & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- Horney, K. 1937 *The neurotic personality of our time*. New York: Norton.
- Maslow, A. 1987 *Motivation and personality (3rd Ed.)*. New York: Harper & Row.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmács, R. 1990 Attachment style and fear of personal death: A case study of affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 273-280.
- Miyake, K., Chen, S.J. & Campos, J.J. 1985 Infant temperament mother's mode of interaction, and attachment in Japan: An interim report. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **50**, (1-2, Serial No.209), 276-297.
- 守屋慶子 1999 他者への目が開かれるとき－授業分析からの考察－ 立命館文学, **560**, 221-251.

- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識
実験心理学研究, **26**, 151-161.
- 鍋田恭行・菅原健介・宮岡 等・佐久間啓 1986
「自己意識」から見た神経症とその周辺 精神医
学, **28**, 379-386.
- 鬼塚幸恵・永江誠司 1994 青年期における自己意識
の発達 福岡教育大学紀要, **43**, 323-331.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作
成 教育心理学研究, **31**, 60-64.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度の日本語版作成の試み
心理学研究, **55**, 184-188.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたく
ない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの
欲求について— 心理学研究, **57**, 134-140.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本的自己の構造—下
位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 213-218.
- Takahashi, K. 1986 Examining the Strange situa-
tion procedure with Japanese mothers and
12-month-old infants. *Developmental Psychology*,
22, 265-270.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年
の対人態度—成人版 愛着スタイル尺度の試み—
東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
—1999. 9. 30 受稿—